

江戸川乱歩旧蔵『古版奇術書』同梱資料

——山本慶一宛・乱歩発書簡控えを中心に

米 山 大 樹

はじめに

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター所蔵の乱歩旧蔵書には、古今東西の奇術・手品に関係する文献が多く残されている。なかでもひと際目を引くのは、江戸から明治期にかけて出版された奇術書のコレクションだろう。

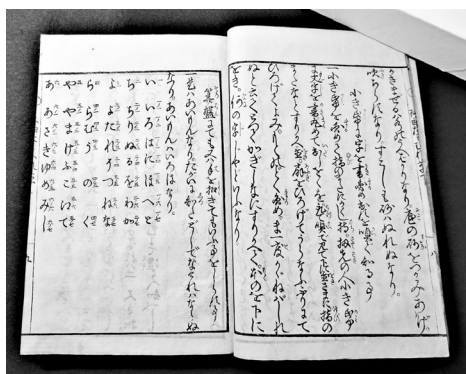
横山泰子が「妖怪手品師・江戸川乱歩」（『妖怪手品の時代』青弓社、二〇一二・四）において、江戸期の伝授本に見られる「妖怪手品」（横山論の定義によれば「仕掛けで幽霊出現などの怪異現象を作り出す娯楽」）に注目し、「乱歩」という人物を妖怪手品の系譜の上で位置づけ、彼の作品を妖怪手品の小説版、あるいは江戸期伝授本の近代版として

解釈する」ことを試みているように、乱歩の文芸と近世奇術との近接はすでに指摘されている。

この近接は、「妖怪手品」に限らない。例えば、『たはふれ草』¹には、「そろばんにていふことを知らす事」として、〈いろいろ〉順を七行×七段に分け、「い」を「一〇一」、「と」を「一〇七」、「ち」を「二〇一」とふたつの数字の組み合わせで当てはめていく方法が紹介されている^{同1}。このような暗号通信も近世奇術には含まれていた。これは、乱歩が『写真報知』（一九二五・三・一五）に「恋二題」の「その二」として発表した小説「算盤が恋を語る話」に登場する、算盤を用いて〈五十音順〉の一〇行×五段に数字を当てはめる暗号の方法と類似している。



【図1-1】『和国たはふれぐさ』上、立教大学図書館蔵、登録番号52071764、七丁裏一八丁表



【図1-2】『和国たはふれぐさ』下、立教大学図書館蔵、登録番号52071763、八丁裏一九丁表

とはいえ、近世奇術への関心や体験が乱歩の文芸に直接影響したというより、それらは複雑な関係性にあるものだろう。乱歩の自作解説に「以前鈴木商店の鳥羽造船所に勤めていた頃の経験によったので、当時私は原価計算の仕事をしていて、非常に大きな金額の算盤を置いたことがあるので、それからふとあんな暗号を思いついた」²とあることから、乱歩が『たはふれ草』を参照して「算盤が恋を語る話」を書いたというわけではないようだ。『貼雑年譜』第一

巻によれば、乱歩が鳥羽造船所に勤めていたのは、「自大正六年十一月 至大正八年一月」、一九一七年から一九一九年にかけて。手製本『奇譚』に暗号の分類法をすでにまわめていた乱歩が、算盤を介在させた「数字代用法」の暗号を、会計係内での通用を期待できそうなものとして創案したことは自然に思われる。

先述の『たはふれ草』は、立教大学図書館蔵・江戸川乱歩旧蔵書に、上巻のみが一冊と上下二揃いが登録されている。上巻のみの一冊と、上下

二揃いのうちの二揃いについては、それぞれ一九四八年一〇月と一九五〇年一二月五日に購入されたものであることが乱歩の『和本カード』³から確認できる。つまり、これらは乱歩が戦後に収集したものである。就労経験と西洋文献からの研究を経て書かれた小説に登場する暗号は、確かに近世奇術と類似した方法ではある。しかし、当時の乱歩が、

近世奇術書を直接参照して執筆したとは考えにくい。乱歩と近世奇術との関係が、書籍の収集と整理といった形式をとって深まるのは、戦後からである。

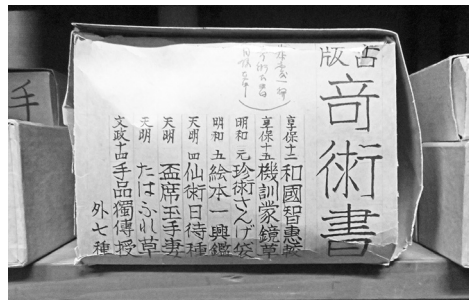
現在も旧江戸川乱歩邸敷地内にある土蔵の二階には、和本の旧蔵書を保管していた桐箱や紙帙が残されている。そのうちのひとつに、「^版奇術書」と大きく箱書きされ、その横に「享保十二 和国智恵較／享保十五 機訓蒙鏡草／明和元 珍術さんげ袋／明和五 絵本一興鑑／天明四 仙術日待種／天明 孟席玉手妻／天明 たはふれ草／文政十四手品独伝授／外七種」と、保管していた書名が列挙された紙帙（以下、『古版奇術書』^{図2}）がある。この『古版奇術書』の箱書きには「（山本慶一編奇術書目録在中）」という注記があり、紙帙のなかには古文獻一五冊とともに以下の資料が同梱されていた。

資料Ⅰ 山本慶一宛・江戸川乱歩発書簡控え、一九五三（昭和二八）年七月二八日、一〇枚

資料Ⅱ 山本慶一編「日本奇術文献目録資料」四枚・右側糊綴じ、二部

資料Ⅲ 『仙術夜半楽』の写真、一枚

山本慶一は、一九二八年生、一九九三年歿。岡山県で中学校教諭として勤務する傍ら、郷土史や奇術に関する文献



【図2】『古版奇術書』、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター蔵

を収集・研究していた人物である⁴。立教大学図書館所蔵・江戸川乱歩旧蔵書には、山本が岡山県の児島から一九五三年八月に出版した『稿本天狗通』巻之中・巻之下・解説（巻之上は欠本）限定二〇部のうちの「老号」をはじめ、山本慶一の出版物が一〇件以上登録されている。

本稿では『古版奇術書』同梱資料を紹介することにより、奇術書の収集を通して築かれた乱歩と山本との交流や、乱歩の近世奇術書研究への貢献を示すばかりでなく、乱歩が蔵書をアーカイブとして構築・利用していた痕跡を確認し、その実態を探る手掛かりとしたい。

資料Ⅰ 山本慶一宛・乱歩発書簡控え

薄葉紙の便箋一〇枚からなる山本慶一宛・乱歩発書簡控え

え（以下、「資料Ⅰ」^{図3}）は、山本慶一編「日本奇術文献目録資料」二部のうちの「返送用」と書かれたものに、ステールで留められている。その末尾には「2875日 江戸川乱歩／山本慶一様」と書かれており、「日本奇術文献目録資料」の編者山本慶一に宛てられた江戸川乱歩発書簡の控えだと考えられる。

便箋は左下に「コクヨ 105」と書かれたB5判縦書きのもので、左端に「年月日」の記入欄があり、罫線が四本入っている。今回は一九五三（昭和二八）年当時に流通していたコクヨ製品を調査することはできなかったが、一九五九（昭和三四）年版のカタログ⁵を参照すると、複写簿の欄に品番「105」として「便箋複写簿（薄野入・厚枠付）」（正副一〇〇枚、上質紙、七〇円）という製品がある。当該資料において、乱歩が発書簡控えを残すために使用していた便箋もこの製品だと思われる。

書簡の内容は、奇術書のリストである。「日本奇術文献目録」に記されたる書にて小生所持せるもの、「貴目録に見当らざりし小生の所持本」、「諸本の予告文〔又〕は広告によって気づいたもの」に波線で区分されており、それぞれ、「資料Ⅱ」記載の乱歩所持本二一点、「資料Ⅱ」未掲載の乱歩所持本二一点、広告や予告欄記載の未所持本四点、

計二七項目の記述となっている。リストのなかで所持本と記された二三点は、すべて立教大学図書館に江戸川乱歩旧蔵書として現存している。

この書簡による「日本奇術文献目録資料」への指摘のほとんどが、『日本奇術書目録（未定稿）』における追加・訂正に反映されているが、書簡に記述された資料で『日本奇術書目録（未定稿）』に追加されなかったものには、半田山人作・北尾重政画『^{根心}極秘巻』全五巻（一七七〇）がある。乱歩は「これは純手品本でなく、まじない本に近い伝授書の体裁なれど、ユーモラスな記事にて、作者の人生観などを交え実に面白い本です。〔目次の〕表題だけ見ると大奇術のようなものや、忍術などあれど、いづれも冗談めかした種明かしにてウィットで解決し実際には行えないようなものです」と評した上で、「但しこれは奇術書目には入れるべきものではないでしょうが」と書き添えており、目録制作への助言という目的から逸れつつも山本にこの本を紹介している。

『^{根心}極秘巻』は、近藤まさる『奇術研究（奇術文献研究誌No.24）』（一九五三・一〇）掲載の「古奇術紹介20」において、「この本は傍系書に加えるべきか、奇術ノートに加えるべきかと考えたが、その両方の部門に入らぬことはない」

として紹介されつつも、「奇術書紹介に加えたのは早計すぎたので、集成のときは訂正するつもりで、外の部門に加えるように思っている」と書かれているように、奇術書風の教訓書であるこの本をどう扱うかについては、奇術書収集家に共通の話題だったようだ。

乱歩は、同書を『古版奇術書』に収め、『和本カード』においても「手妻・謎」に分類しているように、奇術書の関連として保管していた。

なお、川平敏文『「一子相伝極秘巻」考』（『文献探究』二〇〇〇・三）によれば、『^{相伝}極秘巻』は同年刊の『^{相伝}極秘蔵書』の改題書である。立教大学図書館所蔵・江戸川乱歩旧蔵書には『^{相伝}極秘巻』も登録されており、こちらは「手品本六種」と箱書きされた紙帙に保管されていた。『和本カード』では、同様に「手妻・謎」に分類されているが、購入時期は不明である。

〔翻刻〕 山本慶一宛・乱歩発書簡控え

【一枚目】

◎貴

「日本奇術文献目録」に記されたる書にて小生所持せるもの。

△珍術さんげ袋 明和元年本、上下、元表紙元題箋下巻実際は十七丁なれども、丁づけは十八丁なり、明和元年大坂 泉屋卯兵衛板也。

△和国智恵較 元表紙なれども題箋なし 上、下、七三分

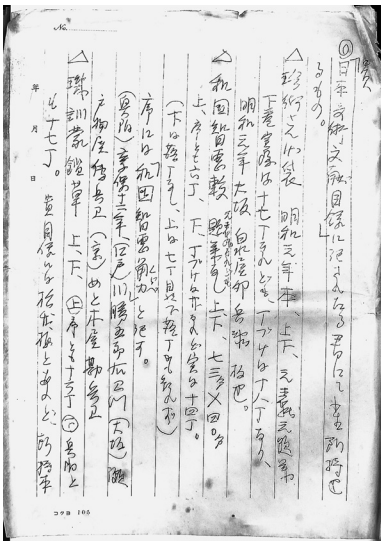
×四〇分

上、序とも六丁、下、丁づけは廿なれど実は十四丁。

（下は落丁なし。上は七丁目以下落丁かも知れず）

序には「和国智恵角力」と記す。

（奥附）享保十二年、（江戸）川勝五郎右エ門（大坂）瀬戸物屋伝兵エ（京）めと木屋勘兵エ



【図3-1】 山本慶一宛・乱歩発書簡控え（「資料1」）、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター蔵、1枚目

△機訓蒙鑑草 上、下、①序とも十六丁②奥附とも十七丁。
貴目録には松、竹、梅、とあれど、所持本

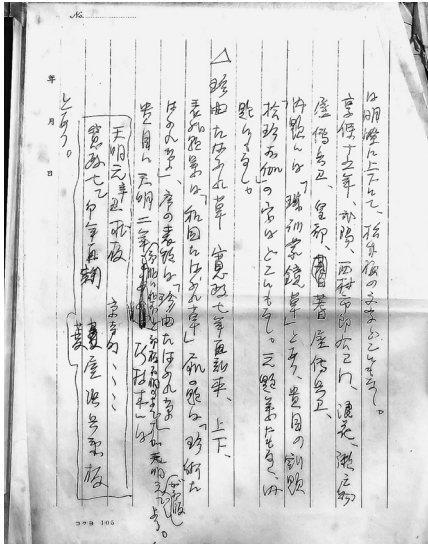
【二枚目】

は明瞭に上下にて、松竹梅の文字どこにもなし。

享保十五年、武陽、西村市郎右エ門、浪花、瀬戸物屋伝兵エ、皇都、著屋伝兵エ、

内題には「機訓蒙鑑草」とあり、貴目の割題「拾珍御伽」の字はどこにもなし。元題箋にもなく、内題にもなし。

△珍曲たはふれ草 寛政七年再刻本、上下、



【図3-2】「資料1」、2枚目

表紙題箋は「和国たはふれ草」扉の題は「珍術たはふれ草」、序の表題は「珍曲たはふれ草」

貴目に天明二年「初版に非ずと初板不明のことですが、天明元「が初版」でしょう。」所持本には

天明元年辛丑求板 京寺町、
寛政七乙卯年再刻 菱屋孫兵衛板

とあり。

【三枚目】

△盃席玉手妻、寛政十一年板なれど、再刻に非ず、板本は天明板と同じ。板は貴目の通り。

奥付、(京) 菱屋孫兵衛

(同) 菱屋治兵衛

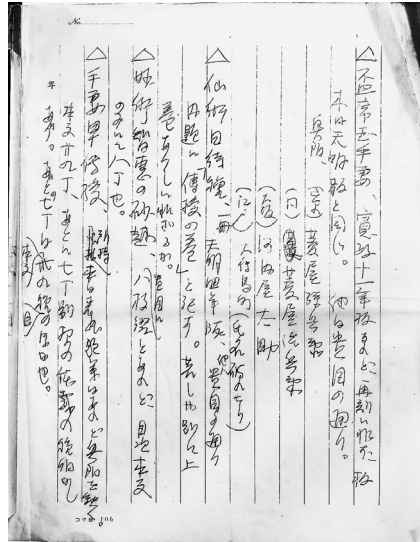
(大坂) 河内屋太助

(江戸) 大伝馬町(氏名破れたり)

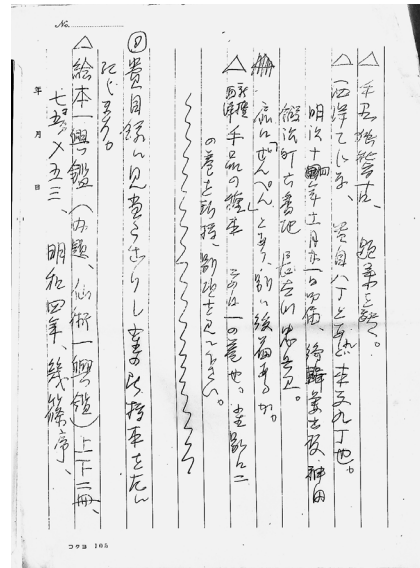
△仙術日待種、一冊天明四年版、他ハ貴目の通り

内題に「伝授の巻」と記す。若しや別に上巻ありしに非ざるか。

△妙術智恵の砂越、「貴目に」八枚綴とあれど、目次本文のみにて八丁也。



【図3-3】「資料Ⅰ」、3枚目



【図3-4】「資料Ⅰ」、4枚目

△手妻早伝授、「所持」本は表紙題箋はあれど奥附を欠く。
本文廿九丁、あとに七丁別様の体裁の種明かしあり。あ
との七丁は「本文」卅九種「目」のほか也。

【四枚目】

△手品独替古、題箋を欠く。

△西洋てじな、巻目八丁とあれど本文九丁也。

明治十四年十一月廿一日御届、編輯兼出版・神田鍛冶町

六番地 長谷川忠兵エ。

扉に「ぜんぺん」とあり、別に後篇あるか。

△^{新撰}西洋手品の種本 これは一の巻也。小生別に二の巻を所
持、別項を見て下さい。

◎貴目錄に見当らざりし小生の所持本を左に記します。

△絵本一興鑑（内題、仙術一興鑑）上下二冊、
七寸五分
七寸五三分、明和四年、幾篠序、

【五枚目】

明和五年、大坂心齋橋、吉文字屋市兵衛、江戸日本橋、
吉文字屋次郎兵衛、同所、山川彦九郎、板

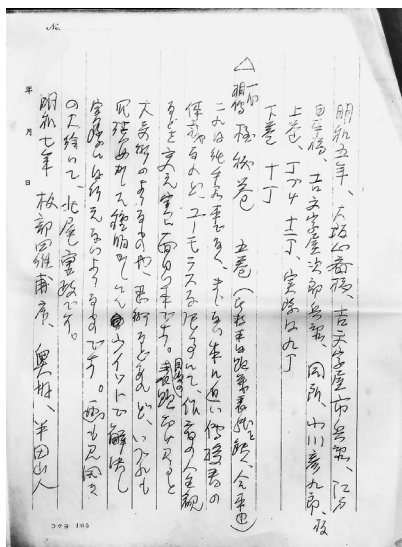
上巻、丁づけ十二丁、実際は九丁

下巻 十丁

△^一極秘巻 五巻（所持本は題箋表紙を欠く、合本也）

これは純手品本でなく、まじない本に近い伝授書の体裁なれど、ユーモラスな記事にて、作者の人生観などを交え実に面白い本です。〔目次の〕表題だけ見ると大奇術のようなものや、忍術などあれど、いづれも冗談めかした種明かしにてウィットで解決し実際には行えないようなものです。画も見開きの大絵にて、北尾重政です。

明和七年 板部羅甫序 奥附、半田山人



【図3-5】「資料 I」、5 枚目

【六枚目】

馳磨（バカマロと読むか）自序、

七三×五一、江戸、大和田安兵衛、須原屋伊八坂

（一）序三丁、目次本文十五丁、（二）目次本文十五

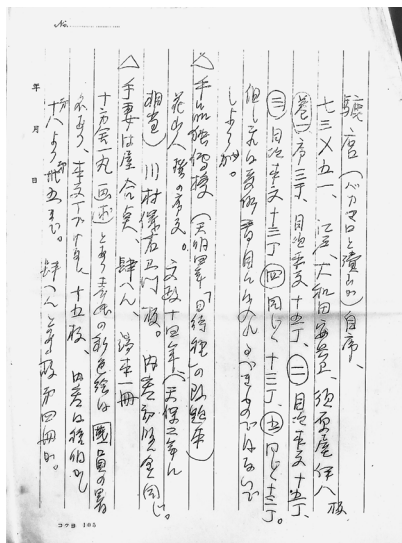
丁、（三）目次本文十三丁（四）同じく十三丁、（五）同

じく十三丁。但しこれは奇術書目には入れるべきものではないでしょうが。

△手品独伝授（天明四年「日待種」の改題本）

花山人撰の序文。文政十四年、（天保二年に相当）川村儀

右エ門板。内巻初版に全く同じ。



【図3-6】「資料 I」、6 枚目

△手妻は屋合点、肆へん、端本一冊

十方舎一丸画述とあり表紙の彩色絵は国員の署名あり、本文丁づけなし、十五枚、四巻は種明かし

第十八より第卅五まで。肆へんとある故第四冊か。

【七枚目】

刊年不明、板元は京、丸屋善兵エ、大坂、河内屋茂兵エ、同藤兵エ、

△題不明、極小本、四〇分×二八分、印刷よろし。

嘉永乙卯（安政二年に当る）一二三亭四五六序

序文目次とも十八丁、種明かし二十八件、各頁■づゝ絵入り。

△新曲ざしき手づま 奥附なし、五八×三八、本文

八丁、絵色表紙、種明かし二十二件、

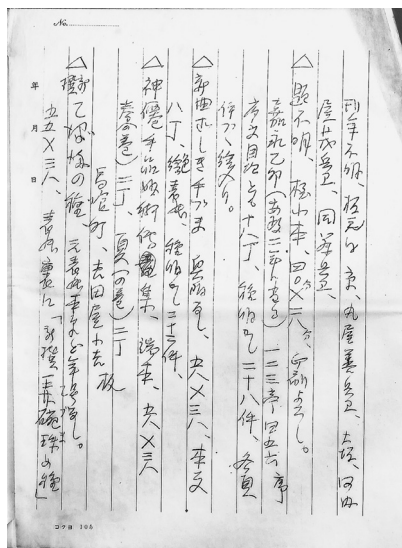
△神僊手品妙術秘伝集、端本、五八×三八

春（の巻）二丁、夏（の巻）二丁

馬喰町、吉田屋小吉板

△^{撰新}てづまの種、元表紙本なれど年号なし。

五五×三八、表紙裏に「新撰弄碗珠の種」



【図3-7】「資料Ⅰ」、7枚目

【八枚目】

と内題あり、「丁づけなし、」本文十丁、大坂平野町淀屋橋角、「絵草紙問屋」石川屋和助板 丁づけなし、十五丁、の別本あり。

△西洋手品の種本、二の巻、

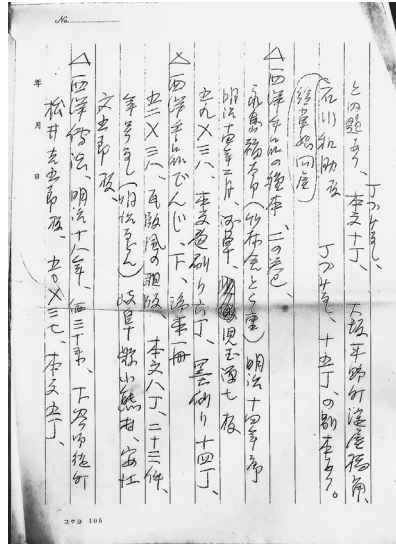
永島福太郎（竹林舎とら重）明治十四年序

明治十四年二月、浅草、児玉源七板

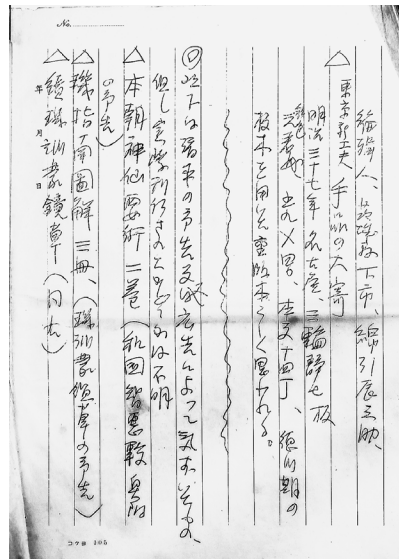
五九×三八、本文色刷り六丁、墨刷り十四丁、

△西洋手品でんじ、下、端本一冊

五二×三八、瓦版風の粗版、本文八丁、二十三件、年号



【図3-8】「資料 I」、8 枚目



【図3-9】「資料 I」、9 枚目

なし（明治ならん）岐阜県小熊村、安江文五郎板、

△西洋伝法、明治十八年、価三十錢、下谷御徒町

松井吉五郎板、五〇×三七、本文五丁、

【九枚目】

編輯人、茨城県下市、綿引辰之助、

△東京新工夫手品の大寄

明治三十七年 名古屋、三輪清七板

〔絵色〕元表紙、五九×四〇、本文十四丁、徳川期の板本を用いた重版本らしく思われる。

◎以下は諸本の予告文〔又〕は広告によって気づいたもの、

但し実際刊行されたかどうかは不明

△本朝神仙要術 二卷（和国智恵較奥附の予告）

△機指南図解 三冊、（機訓蒙鑑草の予告）

△続機訓蒙鏡草（同右）

【一〇枚目】

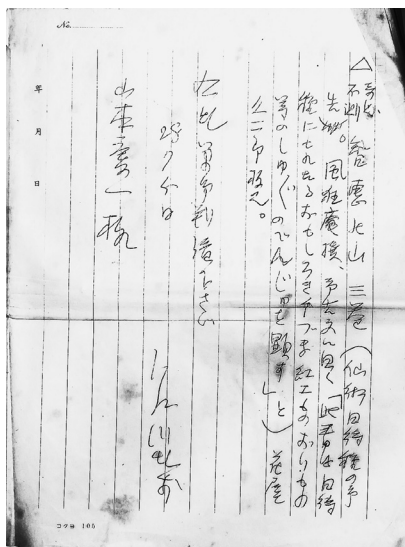
△奇不■智恵の山 三卷（仙術日待種の予告。風狂庵撰、予告文に曰く「此書は日待種にもれたるおもしろき手づま細工ものおりもの等のしゅくのでんじゅを顕す」と）花

屋久二郎板也。

右乱筆御判読下さい

2875日 江戸川乱歩

山本慶一様



【図3-10】「資料Ⅰ」、10枚目

資料Ⅱ 山本慶一編「日本奇術文献目録資料」

日本最古の奇術書とされる陳尾公『神仙戯術』に始まる山本慶一編「日本奇術文献目録資料」（以下、「資料Ⅱ」）には、「書名」「巻数」「寸法」「丁数」「著者」「出版年代」「板元」「内容の概観」といった書誌事項に続き、同八項目の空欄が書かれた「追加目録」欄があり、さらに次のような但し書きがある。

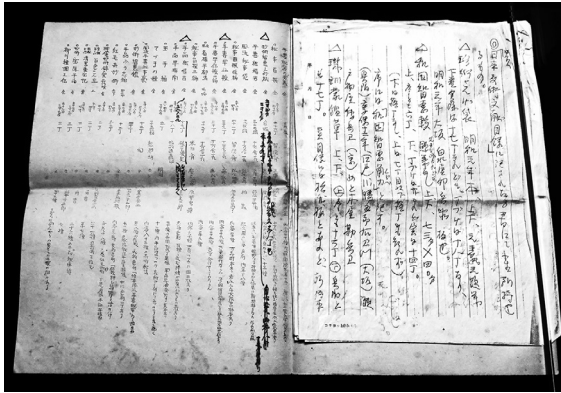
- 一、本目録は「日本奇術文献目録」作成のための調査用として作成されたもので発表の際は簡単な解説がつく予定。
- 二、本目録作成にあたっては坂本氏の奇術文献収録近藤氏作品集その他二三のものを参照した。特に前二者に負うところが多い。感謝す。
- 三、本目録の空欄は編者の調査不備のためにして諸兄の御訂正及び御追加をお願いする次第なり
特に○印のついていないものは目録作成の資料が不足であるので御教示をお願いします。
- 四、貴兄御所持の書物の上に△印を附してご返送下さい。尚本目録にない書物を御所持の場合は追加目録に御記入いただきたく、尚詳細なる御報告がい

たゞければ幸と存じます。

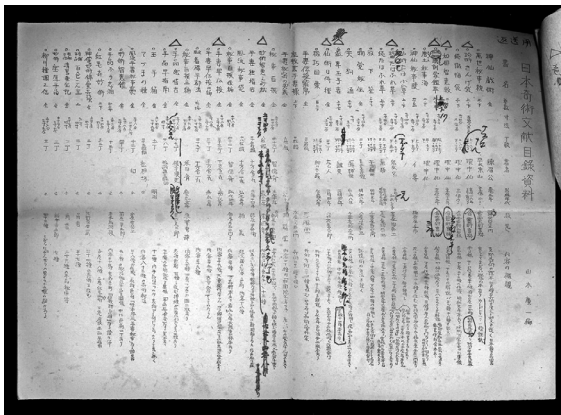
五、日本の奇術研究のためにぜひとも御協力を編者ふ
してお願いいたす次第でございます。

この目録の送付時期は不明ではあるが、山本慶一編『日本奇術書目録（未定稿）』（一九五四・一、三〇部印刷）の「はしがき」には、一九五三（昭和二八）年の春に調査を開始し、「当時私の手元で判明

せるもの百五十ほどを孔版印刷として正副二通を私の知っている極く身近な範囲の人々に送付したところ、十五通の内 近藤勝氏 服部静夫氏 緒方知三郎氏 高木重朗氏^{ママ} 松田昇太郎氏 千頭直次郎氏 江戸川乱歩氏 長谷川豊氏の八氏から詳細なる訂正、書加えをなしたる御返事をいただいた」とあり、「資料Ⅰ」に書かれた日付が一九五三（昭和二八）年七月二八日であるため、この年の春から七月にか



【図4-1】「日本奇術文献目録資料」（「資料ⅡA」）、立教大学
江戸川乱歩記念大衆文化研究センター蔵



【図4-2】「資料ⅡA」、1枚目

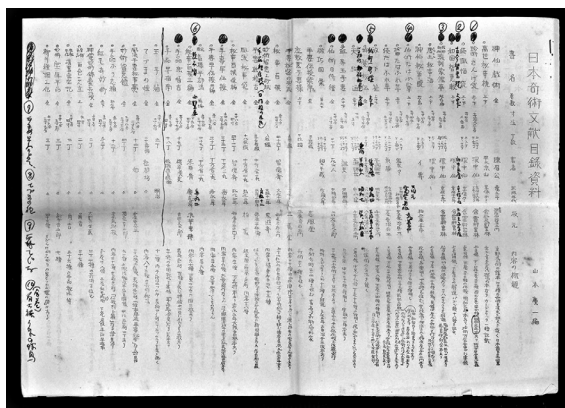
けての短い期間に制作および配布されたと考えられる。
山本が返送用に正副二部ずつ配布したにもかかわらず、乱歩は「追加目録」欄を使用せずに、送られた二部とも書入れをした上で保管し、山本へは便箋で詳細な返信を送ったようだ。その写しが「資料Ⅰ」であり、二部の目録のうちの「返送用」と書かれた一部とともにステープルで右上

一か所を綴じて保管されていた。本稿ではこちらを「資料ⅡA」^④とし、もう一部を「資料ⅡB」^⑤とする。

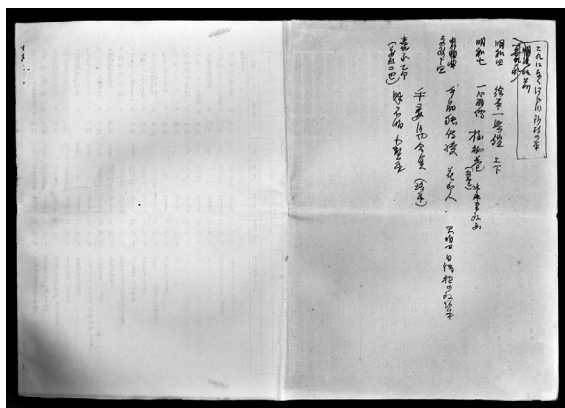
「資料ⅡA」には、山本目録掲載の乱歩所持本一一冊に「△」印が付けられ、その書誌に「資料Ⅰ」の記述と同様の訂正がなされている。

「資料ⅡB」には、第一面と、最終面の裏面にのみ書き込みがある。目録未記載の乱歩所持本について書きこまれ、目録記載および未記載の乱歩所持本の書名の上に「●」印が付けられている。さ

らにそのうちのいくつかには丸数字が「①」から「⑩」まで振られている。また、乱歩の収集した和本の奇術書は、明治時代以降に出版されたものも含むが、「資料ⅡB」には、江戸時代と明治時代の境目に波線が引かれ、四枚目の裏には「これになく江戸川所持の本／「嘉永」以前」とあ



【図5-1】「日本奇術文献目録資料」(「資料ⅡB」)、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター蔵、1枚目



【図5-2】「資料ⅡB」、4枚目裏

る。ここでは、乱歩が収集書を時代によって区別しようとしていたことが確認できる。

〔翻刻〕「資料ⅡB」

【四枚目裏の書き込み】

これになく江戸川所持の本
〔嘉永〕以前

明和四 絵本一興鑑 上下

明和七 一心相伝 極秘巻（五巻） 北尾重政画

〔文政十四〕 手品独伝授 花山人 天明四 日待種の改

題本

手妻はや合点（端本）

嘉永乙卯（安政二也） 題不明 小型本

資料Ⅲ 『仙術夜半楽』の写真

『「仙術夜半楽」の写真』（以下、「資料Ⅲ」^{同5}）は、裏面の記述によると、一七五五（宝暦五）年刊の幾篠『仙術夜半楽』を撮影したものであり、一九五六（昭和三一）年三月三日に山本慶一から送られたものである。『緒方奇術文庫目録』とは、立教大学図書館所蔵・江戸川乱歩旧蔵書の『緒方奇術文庫目録 和書之部』のことで、緒方知

三郎の所蔵する奇術に関する古文獻を整理した同書は、山本慶一の編集によって岡山県児島から五〇部印刷された。緒方知三郎は一八八三年生、一九七三年歿。病理学者として、東京帝国大学名誉教授や東京医科大学名誉学長を務め、一九五七年には文化勲章を受章した一方で、奇術書の収集・研究家としても日本を代表する人物である。

『緒方奇術文庫目録 和書之部』の『仙術夜半楽』の項目には、次のように書かれている。

23 仙術夜半楽 上・下

半紙本（32.5×16cm）

上巻九丁 下巻十一丁

幾篠述

宝暦五年正月（一七五五）

江戸吉文字屋次郎兵エ 小川彦九郎

この本はよく痛んでいたのので後に手入がされている。表紙も元のまゝではない。内容は上巻が目録 下巻はその伝授で十四種小奇術のほか影絵の伝授あり、内に『舌にこよりをさす術』『あふぎの絵より蝶たはふる仕方』『紙人形おのれとうごくからくり』等あり、十方舎一丸の手妻早伝授のたねである。下巻末に『妙術秘伝の巻終』とあり。

資料Ⅲには、この解説部に引用されている「舌にこよりをさす術」が写っている。

〔翻刻〕「資料Ⅲ」

【表】

舌へ

こよりを

とふす

しやう

をのく

仕様の伝授下の巻にあり

らうそくに

火をともし

其うへを紙を通すじゆつ



【図6-1】『仙術夜半楽』の写真（「資料Ⅲ」）、
立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター蔵、表

【裏】

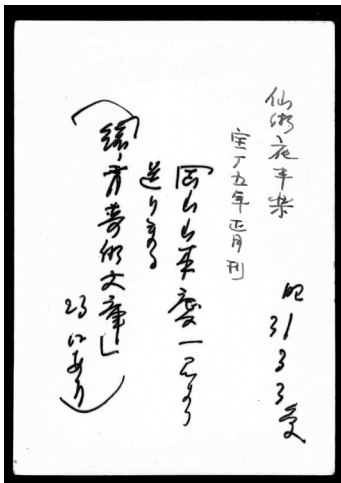
仙術夜半楽 昭3133受

宝暦五年正月刊

岡山山本慶一君より

送り来る

（「緒方奇術文庫」23にあり）



【図6-2】「資料Ⅲ」、裏

【注】

- 1 鬼友『たはふれ草』（天明元年求版・寛政七年再刻）。題箋「和国たはふれ草」、序題「珍曲たはふれぐさ」、上巻末に「たはふれ草」とある。資料Ⅰでは「珍曲たはふれ草」という見出しのもと、「表紙題箋は「和国たはふれ草」と記述されている。『緒方奇術文庫目録 和書之部』によると、下巻末に「仙術たはふれ草」と書かれた別系統のものでは「そろばんにていふことを知らず事」を含む五項目が差し換えられているとのことであるが、立教大学図書館蔵・乱歩旧蔵書のものすべて差し換えられていない系統のものであった。

- 2 引用は、江戸川乱歩『江戸川乱歩全集 第一巻 屋根裏の散歩者』（光文社文庫、二〇〇四・七、三七六頁）による。
- 3 立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター寄託資料
- 4 山本繁子『追悼・山本慶一の軌跡』（書肆亥工房、二〇〇六・八）
- 5 黒田国光堂企画室編『コクヨ製品カタログ 昭和三十四年版』（黒田国光堂、一九五九・六、三九頁）

付記

- ・ 本稿における引用および翻字に際しては、原則として、ルビは省略し、漢字は新字体を用いた。また、変体仮名は通行の字体に改めた。
- ・ 塗りつぶし、ミセケチ内の文字は省略し、判読不明の文

字は■で示し、挿入部は□内に記した。また、／は改行を、■は各資料内のページ等を示す。

（立教大学大学院生）